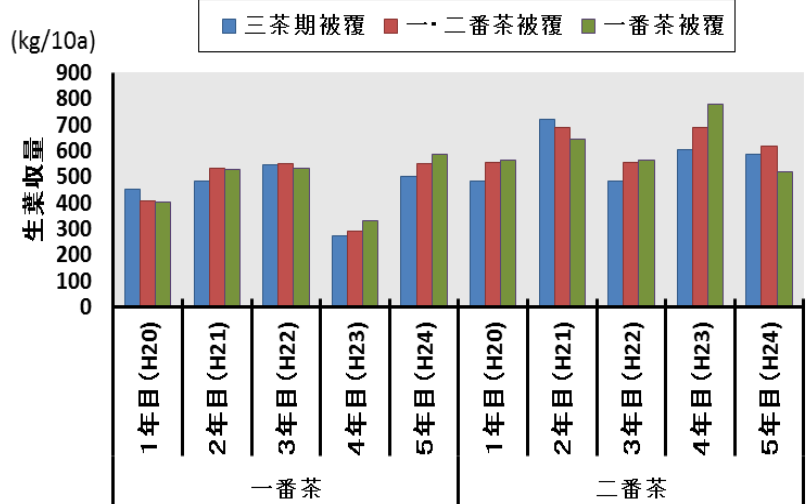


# 西濃地域に適した茶の直がけ被覆栽培体系の開発

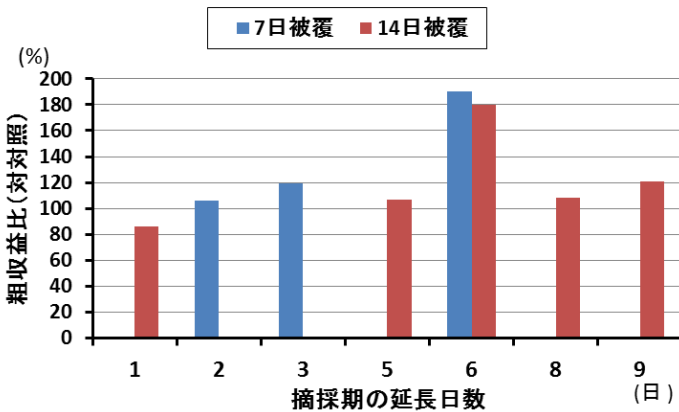
茶樹を被覆し遮光することで品質が向上し、かぶせ茶や玉露のように付加価値が高くなりますが、収量や樹勢は低下します。そこで、被覆棚などの施設が不要で取り組みが容易な直がけ被覆栽培において、西濃地域に適した被覆体系について検討しました。



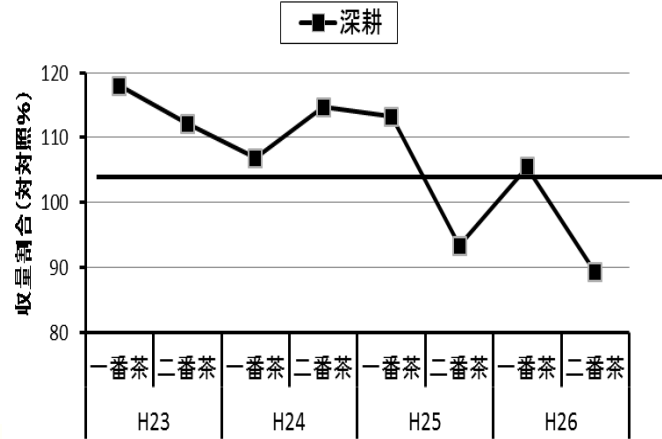
直がけ被覆による資材選定の様子



14日間被覆における被覆茶期数別一番茶、二番茶の生葉収量



一番茶における摘採期の延長日数と粗収益の関係



被覆栽培における深耕処理の影響

## (研究成果)

- ・ 遮光率85%の白黒ラッセル織資材で、被覆効果が高くなります。
- ・ 14日間の被覆では、被覆する茶期が多いほど3年目から収量は減少します。
- ・ 二番茶では、前作の一番茶で被覆されていることで収量は増加します（データ略）。
- ・ 一番茶で粗収益が最大となる摘採期の延長日数は6日となります。
- ・ このため、秋冬番茶に被覆せず、一番茶と二番茶に被覆する体系が西濃地域に適しています。
- ・ 深耕処理することで被覆ストレスによる収量の低下を抑制できますが、連年実施することで効果は劣ります。